



講演を行う小倉先生=江澤陽子撮影

# 家族のかたちと愛情を問い合わせなおす —その先に求められているものは何か?—

講師 小倉康嗣先生

## 市民向け「ぬくもり講座」に368人

NPOぬくもりほつらいんの一般市民向け傾聴啓発事業第一弾としておこなわれた「第一回ぬくもり講座」は10月17日をもって全5回のカリキュラムを終了し、のべ368人の市民が参加した。

習志野市の茜浜ホールを会場に6月20日にスタートした。この講座は、第一回と最終回を当NPO理事長の渡辺晴代が担当。それ以外の3回を社会学者の小倉康嗣氏(立教大学講師)が「家族のかたちや愛情のあり方を問い合わせなおす」というテーマで講演した。ここでは、小倉先生の講演内容を要約して紹介します。

### 第2回 「標準的家族なら幸せ」は本当か?

これから3回は、社会学という視点から家族というものを見ていきます。様々な経験を背負った皆さんと生きる知恵の交流をするつもりで話していくま

とを「どげが種子になる」という言い方をしています。どげを種子にしてくれるのが社会学という学問だと思っています。

僕の社会学のイメージは菓子袋の切り口です。菓子袋の切り口は、ほんの数ミリしかないけれども、これがないと袋を開けるのは大変です。切り口から袋を開けるように、今いる自分の枠に切り込みを入れて視界を開いてくれる、そういう営みを社会学では「相対化」といいう言い方をします。反対は「絶対化」です。言い換えれば、切り口は気づきであり、その

開いてくれる。気づきという点で、傾聴と社会学はシンクロしてくると思います。僕たちは、家族というものを考えるとき、知らず知らずのうちに標準的家族(父母がいて少ない子供を大切に育てる)をイメージしています。標準的家族であれば問題が無く、しあわせになれると考えられていました。そこで家庭育児が女性の生きがいなんだ、母性愛なんだと思います。愛情つていうのはだという観念が流通します。愛情つていうのは自発的な感情であるはずなのに、ある社会状況では愛情を経験することが社会的に要請されて、愛情を経験しないことは逸脱としてだめだと制裁を受ける、これはまさに愛情が規範化するということです。

現代社会では、愛情を証明することがなかなか難しくなってきてます。愛の規範化は自責の念につながりやすく、自分で自分を愛のない人と思うことはつらく追い詰められて、家族の内閉化をもたらします。

### 第3回 愛情欠如ではなく過剰が問題

今日は、愛情証明へのあたりの現代的背景と

いうお話をします。

右肩上がりの時代は、豊かになっていくことで愛情の確認のしや

すい時代だったんです。夫は家族のためにお金稼いでいる愛情の実感、専業主婦は家族のために手をかける愛情の実感です。

### 第2回の感想

小倉先生はフレンドリーで人間の深い哀しみを知っている熱い学者さんだと思つた。

社会学と傾聴が結びついていると知つて社会学が身近に感じた。

社会につくられた規範の中でできない自分を責めていた。

母としてラクになった。

